

追悼 竹下亘先生の訃報に接し

グローバルウォータージャパン 吉村 和就



水の安全保障に関する研究委員会発足時の一コマ。前列右が在りし日の竹下議員、後列右から2人目が筆者、右端が山田氏（平成20年8月）

自由民主党の竹下亘復興大臣が9月17日に逝去した。竹下議員は中川昭一議員が立ち上げた特命委員会・水の安全保障研究会で事務局長を務めるなど、わが国の水問題の解決に多大な貢献を果たされた。故中川議員に「水の3賢人」と称され、同研究会をはじめ、水の安全保障に係る取り組みの屋台骨を担った吉村和就氏、竹村公太郎氏、山田正氏のうち、2氏に追悼文を寄せていただいた。

自由民主党竹下亘・元
復興大臣の訃報（9月17日）に接し、深く哀悼の意を表します。

多くのマスコミは竹下先生の政治家の活躍として、財務副大臣、衆議院

予算委員長、国会対策委員長、党総務会長などを歴任、第2次安倍内閣で復興大臣に任命されり。平成18年夏、故中川昭一先生から3人への当然の呼び出しがありました。「私は農水大臣や経済産業相などを歴任したが、いかに安全で、かつ適量を世界の人々に給配

水していくかに関心を持ち、5年ほど個人で勉強したが、あまりにもすそ野が広い。君たちを水の三賢人と呼ぶ。水の特命委員会を作るので手伝え」と。さらに「資源小国である日本にとって水問題は他人事ではない。水の有効活用と水資源の保全を考えよ。それが日本の生きる道だ」と厳命されました。

その自民党「水の特命委員会・事務局長」に任命されたのが、竹下亘先生でした。

竹下先生とじっくり私がお話ししたのは、立ち上げの事前打ち合わせの時でした。特命委員会の事務局長に内定していた竹下先生は「吉村さん、私は島根県の小さな田舎の村に生まれました。当時は農業（稲作）だけでなく、林業（炭焼き）をしなければ生活できませんでした。農業も林業も水が命。水を守ることが国家の使命です。一緒に水問題を解決しましょう」とゆつたりと語られました。その言葉が今でも心に残っています。

特命委員会の初会合は12月14日、それ以降は毎週水曜日（水にちなんで水曜日）午前8時から約1時

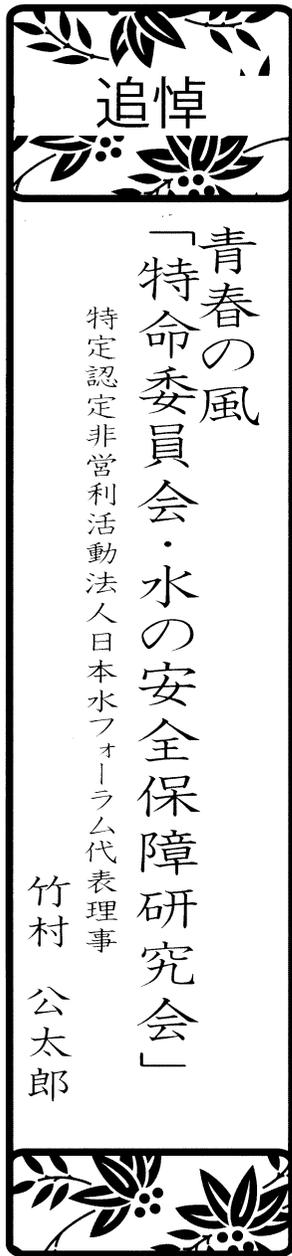
間、国会議員はもちろんのこと、第一線の水関係者（関係省庁、学会、産業界、NPOなど）50人以上を集め、国内外の水問題を討議しました。今までの特命委員会と異なったことは、中川会長が「官庁からの発言は一切遠慮せよ。しかし聞かれたらキチンと応えよ」と役人に厳命したことでした。毎回関係者が多数集まり、お弁当が足りないこともありました。

竹下先生は事務局長として、す

べての会合の司会進行を務め、特に利害関係者への発言の割り振りが絶妙でした。竹下先生の政治信条は「聴くを8割、発言は2割」。決して自分の主張を押し付けず、最後に皆の意見をまとめていました。それが故に広い人脈を持ち、どこにも敵を作らない姿勢が、高く評価され総務会長など党の要職を任されたのでしょう。兄の竹下登

（第74代内閣総理大臣）の信条は「汗は自分でかきましよう。手柄は人にあげましよう」であり、竹下家に伝わる「人への深い思いやり」の影響もあつたのだと思います。特命委員会「水の安全保障研究会」の議論、事前打ち合わせを含め50回以上に及んだ結果は約670ページの最終報告書にまとめられ、のちの超党派による「水の安全保障戦略機構」の設立につながりました。

復興大臣の時も「私の政治活動の原点は、田舎を守ることであり、ふるさと創生を推進するとともに、中山間地の生活の利便性を上げる。そのためには公共インフラ（道路、上下水道、通信、防災など）拡充に力を入れる」と言い続けていました。党の要職に在りながら、常に水問題の解決に傾注し、われわれ水関係者にエールを送り続けていたのだいた竹下亘先生に、心から感謝を申し上げます。合掌。



特定認定非営利活動法人日本水フォーラム代表理事

竹村 公太郎

竹下亘・元復興大臣の訃報に接し、心より哀悼の意を表します。

14年前の平成19年、竹下先生の下で「特命委員会・水の安全保障研究会」でお仕えることになりました。その特命委員会の誕生の顛末は吉村和就さんが述べられて

います。私はかつて経験したことがない特命委員会の様子を述べて、それが現在の水インフラ全体の大きな潮流となっていることをご紹介します。

本委員会は故・中川昭一先生の指導の下に誕生しました。その事

務局長に竹下亘先生がご就任されました。国会、特に自民党内部の人事事情などツユ知りませんでした。しかし、本委員会の中川昭一先生がお選びになった人事だということと、委員会では事務局長の

役目は極めて重要だということは

承知してました。

委員会は毎週水曜日の朝8時から1時間、密度の濃い委員会となりました。毎週、有識者がプレゼンし、それに対して委員会のメンバーが質問や意見を述べる方式で進められました。

委員会のメンバーから、日本が未来に向かって安全にかつ健全な発展を実現するためには、

▼解決すべき水分野の課題は何か

▼その課題を解決する方向性は何か

▼未来に向かうため不足しているものは何か



水の安全保障研究会に出席する筆者（左）と在りし日の竹下議員（右）。中央は故中川議員

▼水分野で日本が世界に貢献すべき技術とビジネスは何かなどの問いかけがあり、これらに對して、学界、有識者、産業界、国際機関、地方自治体そしてNPOが各々の立場から率直な意見を陳述展開していききました。なお、中川会長の指示により、各省行政の発言は委員会が質問したことに答えるようにというルールでした。

水分野は治水、農業、産業、水

道そして環境と限りなく幅広いのです。個別水分野の課題の奥行きも深いのです。その上、全国各地の代表である多くの国会議員が拳手をして、自分たちの出身地の水問題を述べ、その解決の道を問いかけられたのでした。

水特命委員会での議論は、水分野の複雑さと地域個別の事情・歴史が絡み、複雑に錯綜していきま

した。

竹下先生はこの特命委員会の全ての議事進行を仕切られたのでした。

学者者、有識者は厳しく現状の水システムの問題点、改善点を指摘します。産業界は海外進出の課題を指摘します。自治体はインフラ更新が進まず施設の老朽化に脅かされていることを訴えます。N P

Oは住民レベルの視線の課題を指摘します。地域の解決困難な水課題を抱えている国会の先生方は、力を込めて行政に抗議することもありました。

竹下先生はこれらの状況下でも冷静に議事を進められ、未来の方向性を委員たちに問いかけ続けられました。

特命委員会が佳境に入って行つたある日、竹下先生が私に耳打ちされました。「委員会のまとめを頼むぞ」と言われたのです。それから生きた心地がしませんでした。このような複雑な内容の特命委員会の取りまとめなど不可能です。しかし、静かな口調で、当たり前のようにおっしゃる竹下先生には抗弁できませんでした。

19回開催された特命委員会の報告書は670ページにもなりました。プレゼンされた有識者たちのプレゼン資料を掲載し、それらの取りまとめとしては、日本が力強く発展していくためには、

▼各省連携はもとより、地方自治体間の広域的な連携が必要
▼行政、民間企業そしてNPOのきめ細かい連携が必要

▼日本の水問題解決のみならず日本への尊敬に繋がる国際貢献が必要

▼歴史の中で育まれた日本の英知と先端技術による水ビジネスの展開

特に、「水問題は自民党の特命委員会だけの問題ではない。国民的な課題である」との強い思いで、「チーム水・日本」という言葉を生み出しました。さらに本特命委員会の報告を実行することが重要であり、「チーム水・日本」で具体的にその歩みを進めていくことが提案されました。

それが元北海道大学総長の丹保憲仁先生率いる「水の安全保障戦略機構」の設立となつていったのです。

中川先生と竹下先生に率いられた特命委員会のチームは皆元気で力に溢れていました。まるで青春を謳歌していたかのようにでした。